

タイトル：「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」
(平成 20 年度第 1 回研究会)

日時：平成 20 年 6 月 28 日 (土曜日) 午後 1 時半より午後 6 時

場所：AA 研 301 室

報告者名 (所属)：1. 三尾裕子 (AA 研所員)「プロジェクトの方向性について」
2. 床呂郁哉 (AA 研所員)「グローバル化の人類学についての概念整理と問題提起」

1. 三尾裕子 (AA 研所員)「プロジェクトの方向性について」

「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」(以下、「グローバル化の人類学」)では、グローバル化やトランス・ナショナリズムの諸理論の持つ問題点を、実証的なデータから検証し、オルターナティブな理論化を試みることを目的としたい。本報告では、まず「グローバル化」に関する代表的ないくつかの理論をレビューし、また報告者の研究対象である中国系移民の事例を念頭におきながら、問題点を抽出し、議論のたたき台とした。

本報告で提示した問題点は、大まかには次の 2 点である。1 点目は、グローバル化を輸送手段やメディアなどの発達によって、人、モノ、資本、情報の流れが地球規模で進行し、しかも時間と空間の圧縮によって世界各地の相互関係が密接になった 20 世紀末以降の現象に限定することの限界である。しかも、こうした動きは、西欧を中心として、地球上を中心と周辺 (あるいは半周辺を含める) に同心円状に分けていくモデルを前提とする。こうした考え方に対して、報告者は、グローバル化を個別主義の普遍化として捉えるロバートソン(Robertson R. 1992)などの考え方を参考に、グローバル化を諸地域間での相互依存関係の程度の増大、世界の縮小化として捉えることとしたい。そうすることで、近代のグローバル化は確かに西洋型の近代性の地球規模での伝播を容易にしたが、グローバル化そのものは、近代化に先行したものと考えることができる。2 点目は、人類学における民族誌記述に関わる問題である。グローバル化とともに、人類学では、フィールドの脱領土化が議論されるようになった。しかし、そもそも、土地と社会、文化を一つのセットとして考えてきた伝統的な民族誌記述は、世界がグローバル化したために通用しなくなったと考えるよりも、グローバル化が近代化に先行していたとすれば、そもそも孤立した一セットとしての社会という前提自体が問題視されるべきであろう。ローカリティとはそもそも瓦解しやすいと見るならば、人間は、放置すれば瓦解しかねない社会を土地や文化と 1 対 1 に対応させようとしてきたと考えることが可能になるのではないか。

2. 床呂郁哉 (AA 研所員)「グローバル化の人類学についての概念整理と問題提起」

本報告は共同プロジェクト「グローバル化の人類学」を実施していくに当たって、まず主題となる「グローバル化 (Globalization)」の概念の内包や外延について、報告者のフィールドであるスルー海域世界での若干の民族誌事例も紹介しつつ概念整理を試みたもの

である。

現在、グローバル化について論じることには特有の困難がある。それはまず何よりも「グローバル化」の定義のあいまいさに起因する。「グローバル化」について論じる言説は研究者からメディアまで夥しい数にのぼるが、そもそも「グローバル化」とは何であるかをめぐっては複数の論者が異なるニュアンスや定義を与えており、同じタームを用いつつ論者の間に少なからぬ差異や多様性がありつつ、必ずしもそれが自覚されていないのが現状である。

そこで報告者は「グローバル化」概念をめぐる混乱を腑分け、概念整理する必要があると考え、それを以下のように整理することを提唱する。すなわち（１）大文字のグローバリゼーション（２）「プロト・グローバリゼーション」（近代以前から、非西欧社会）（３）「微細なグローバリゼーション」の三つである。このうち（１）は主として近代以降の欧米を中心とした「中心-周辺」的モデルによって特徴づけられるものである。（２）は近年の歴史学とくにグローバルヒストリーや海域世界研究などで指摘されることの多い、前近代非西欧世界における広域に跨るヒト、もの、文化の移動や交通、越境、流動現象などを概念化したものと考えることができる。（３）は本研究プロジェクトのメンバーでもある湖中真哉氏の提唱する概念に依拠しているが、欧米や他の中枢（中華帝国等）等を中心とした（１）や（２）の概念とは異なり、「周辺世界」相互のヒトやモノ、文化の流動を含む現在も進行中の微細で多中心的なグローバル化を指す概念だと考えられる。

「グローバル化の人類学」をひとつの研究テーマとして実施していく際にはこうして以上のような（最低限）三つの概念間の差異を踏まえて検討していくことが有効であると報告者は提唱する。しかしこのことは必ずしも、上記の三つのグローバル化の現象が相互に全く無関係であることを意味するものではない。報告者は後半、フィールドであるスルー海域世界の民族誌的事例を検討しながら、実際には現地において「大文字のグローバリゼーション」、「プロト・グローバリゼーション」、「微細なグローバリゼーション」の三つの現象が独立しつつも相互に関連し絡み合いながら進行しているという事実を注意を喚起した。

上記２名の報告の終了後、休憩を挟んで、共同研究員各自の自己紹介と、「グローバル化」を鍵概念として、どのような研究を推進すべきかについて、各自のフィールドでの経験や研究と照らし合わせつつディスカッションを行った。その結果、グローバリゼーションを文字通りの「地球全体」への人、モノ、文化、情報の行き渡りと捉えるよりも、それらのローカルな文脈からの脱埋め込み、流れの加速化、標準化、相互関連性といった鍵となるファクターのセットとして捉える方向性が提案された(cf. Erikssen T. H. 2007)。